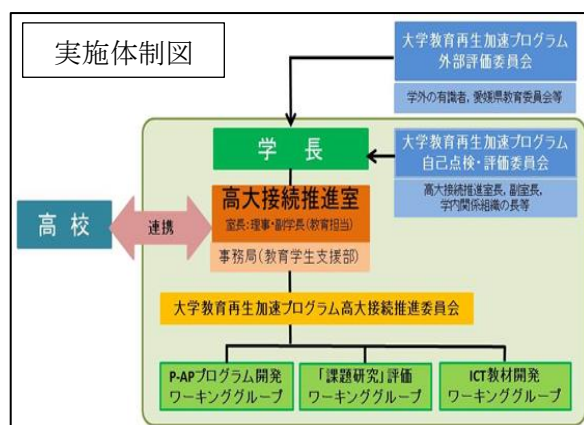


進捗状況の概要（1ページ以内）

【学内の実施体制】

学長の下に「高大接続推進室」（室長：理事・副学長（教育担当））を設置し、大学全体で実施可能な体制を採るとともに、その下に高大接続推進委員会を置いている。また、3つの重点事項を検討するため、高校教員も構成員とする3つのワーキンググループ（P-APプログラム開発ワーキンググループ、「課題研究」評価ワーキンググループ、ICT教材開発ワーキンググループ）を設置している。さらに、学内関係者による「自己点検・評価委員会」及び学外有識者等による「外部評価委員会」を設置し、評価体制を構築している。



【中心となる取組】

① パイオニア・アドバンスト・プレイスメント（P-AP）のプログラム創設と二重（デュアル）単位の付与

② 「課題研究」評価に係るルーブリックの開発

③ 高大で一貫して汎用的能力を育てる ICT（eラーニング）教材の開発・運用

以上、3つの重点事項が中心となる取組であり、各々ワーキンググループを設置して取り組んでいる。

【取組の成果】

① 平成28年度から実施している高校生を高大接続科目等履修生として受け入れる制度を継続した。これにより、対象の高校生は大学の授業科目の単位を修得するとともに、当該高校生が在籍する高校においては「学校外における学修の単位」として高校の単位認定を行い、高大接続による取組を推進することができた。

② 高等学校教員と大学教員との協働によって、「課題研究」評価に係る簡易版ルーブリック評価シート（プロセス評価、課題発表評価）を開発した。また、既に開発したルーブリックを利用して「課題研究」の評価を実施し、その結果分析を行った。さらに、ルーブリック評価の利用に関する教員へのアンケートを実施し、その有用性を確認することができた。

③ 開発したeラーニング教材を用いた授業を実施したほか、新たにeラーニングコンテンツ（プレゼンテーションスキル2編）の開発を行った。これにより、生徒の情報活用能力を実践的に育成できただけではなく、能動的な学習が促進され、学習した内容が定着するなどの効果が確認された。

【補助期間終了後の継続発展に向けた取組】

開発したeラーニング教材は、他の高校での利用促進を図るため、高校教員が参加する各種会議等を利用して高校等への広報活動を積極的に行っている。また、高大接続科目等履修生の受入に当たっては、新たな料金設定を行うなど、本取組の教育効果や継続性を考慮して安価な費用を徴収することを検討している。

課題研究を評価するルーブリックに関しては、SSH校やSGH校など課題研究を重視する高校においては継続して利用される。また、多面的・総合的な大学入学者選抜が本格化する平成33年度入試以降、本学は全学部的一般入試で調査書を評価したり、全学部の推薦入試等で活動報告書を活用したりする方針を平成30年6月に決定・公表する予定である。そのため、課題研究の評価は重要度を増し、補助金終了後も高校教員との意見交換を継続し、ルーブリックを改良する。

【学内外への波及効果】

ホームページでの公開や学会発表に加え、全国大学入学者選抜研究連絡協議会でのポスターセッション（富山、平成29年5月）、京阪奈三教育大学連携事業シンポジウム（大阪、平成29年11月）、スーパーグローバルハイスクール管理機関等連絡会（東京、平成30年1月）、文部科学省スーパーグローバルハイスクール(SGH)事業の検証に関する有識者ヒアリング（平成30年2月）、第24回大学教育研究フォーラム（京都、平成30年3月）などの機会を活用して成果発表を7件行い、全国的に情報発信することができた。

（テーマ：Ⅲ（高大接続）、大学等名：愛媛大学）